

游
山
水
類
物
志

四

6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 6 7 8 9 5 6



北山集

かくしてやうへ中納言たもくちやみがくばおおあいきを
くわびたまよて修法河をせめ勢がくばゆゆ、うり
公と志田ふるも侍ひ、命令をも侍らすもくさき
く行ひ、おりせまとくと申たまふ、もはやうけ成
せたまおめどより今もく、生てうら、やと思ふ、
象うるわ沈みて、まみよくよの鶴肇にまちあ
られて、なりおどりつまんぬよ思ひくも、我ゑのかちう
因取くよせり、令くよあらしが、なりゆと思ひめた。
みえれども、我おお大袖えに成り、また報うてこまき



されど、是のみを廻^{アキ}て田ゆる本、はてハ老のばて元
の黒れもかへてしと、おのれよかとほんせすあら、と
ちゆうふを、たねやがみて、あくられよゆるるかまうれし、
女君、とて大納言をうれ、一人なきありて、あうゐるま
と因^クせまらんとすよふを、ゆびるて、くふるふるがやと
ねじと、えりうがの大納言すまさんす難^{ハシ}、人の持
ともぐとにあらむじ、あのを唐^カらんほつまで、えだく、お
詫^{ハシ}すまうで、ひりと、かくなん思ひへるを、ききわよが
ともえく侍れど、それ^ハをそんばづよ行^{ハシ}ま、くくよる
にもうぬはうに、おののすとお侍らんと因^クひ侍^ム、みけ

しきくうまめさせびへとあらきをびふ、何^モ、は田^ハん
すまくやうじるべやうて、奏^トまうせよ、大納言ハを
くもゆくあら、我^ハなる世なれ^ハとおほてのう方
へ^ハかづわなくともひびき^ハとて、告^{ハシメテ}て、奏^トまうせび
ひて、サ御^ミ、大納言^ト成^{ハシメテ}ふ宣旨^ト、御^{ハシメテ}て、是^トを
ゆく、お酒^ミ、わづくらうゆくもんうべとよまく、祝
に^{ハシメテ}て、おれび^{ハシメテ}、功^{ハシメテ}徳^トうんじゆ、よめ、うじよ
おまくちて、射^{ハシメテ}て、まこと^{ハシメテ}業^ミのいのちにて、も近^{ハシメテ}くと、
人にもうんきするまよや、が^{ハシメテ}きこ^{ハシメテ}て、聞^{ハシメテ}
つよめて、おまく居^{ハシメテ}て、ゆ^{ハシメテ}まよび^{ハシメテ}りえ、おおらすべと

えおうとくとも、我子どもせんあふじかく況せぬ生
うれまえをつるやうつるかくさけるは佛をすこし
にても悚^かなりけん、あくまぢるまなみんとくも
きけれど、三人算とかれどく我とくわく
ちうひきつあれ、あくまぢうきのひづりうるせ
れの後^{きん}ハ臺^たぢゆうてふうたる半もなれど、内
かづり足をかくろくれく足もへりてハ船^{ふね}くもくち
して、か死^きまばかちりにハきめと子にやられ、がんちとに
まれ、あよほすまつれど、いとまかくういります、が生^{大穂}
ばの方^カ、舟^カ、とくあわくと思ふ、もとに来て、いと活

はくちうそにて、男君かま一^アあそよおハすげ^アくと、
辯^シきあり^アく^ハいと恐^アとゆかび^ハたのれ、^{大穂}おほゆけ
も^アく^ハおけ^アすき^ハた、^アの夷^アみ^アく^ハれ
くか^アしけ^アく^ハ思^アへ^アおせよ^アき^アつ^アで^アあ^アく^ハ、
も、大^アか^アち^ア護^アとも^アせうりて^アなど^ア令^アじ^アもと^アや^アす^ア、其^ア
より^ア出^アす^アて、左の^ア大^アい^アよ^ア余^アり^アぞ^ア、又^ア内^アよ^ア余^ア
わ^ア珍^ア、^アよ^ア縁^アす^アす^ア、^アも^アお^アじ^アや^アう^アに^アて^ア残^アす
るも^アお^アき^アハ^アち^アす^ア、大^ア納^アえ^アき^アる^アよ^アり^アて^ア、^アお^アき^アく^アる
き^アす^ア、今^アハ^ア臺^アば^アり^アと^アゆ^アる^アお^アけ^ア、^ア死^アがん^ア命^ア
惜^アう^アす^ア、^アお^アき^アく^アり^ア、^アい^アよ^アく^アか^アが^アお^アか^アと^アゆ^アお^アいて、

大船よりお出でをあがめり、おとづかへつけまくされ
しと申してあり、おむけの五人集ひて、まつり
なげよびふね、おとづれゆき子どもはまつりおとづれ
とも思はば、おねえおのの方は傷おひするをうれとい
みじうめでたよものよおほして食もよわりうやふ、酒
づけをれん余りたよしとよあめも一げきく成もて
珍りて、生徒とよ伝ふんすどりん乃るにほらか
ら思ひきぞ、あそちの中にもうとくあきれは論
かう怨とあくもありて本がんとて、找あもとほまくア
喰もきて、口の広せ著、佩刀をと取もて、えらせよ

アガメムシトモ、おとづれゆきのうてありおとづれ
すども思とがしててもうと申しておとづれ
やうにか入り、初よおじよだす、おとづれ
おとづれゆきよ物をうける、次半許多のまことから見え
るを思ゆと申へど、いとまかへうのよもと、きんご
ハキスレウとおとづれ、せぬもありてもうほめれど、彦
宣くよりしとて、おねえおのの方にたてまつりおとづ
れのよもと、おとづれのよもと、さとのよもと、おとづ
れど、又ほくらぬとせぬがん、年をよわつても
きくまつて、七十にがくよで死まかたぬみまつ

ま。まづやまとりつる、まだじせんもよりなごはをむのれ
福くらまうん、子どもをくわう、おれき者もくるるがくち
よみて里へもおめせのくみ祝ひまくらさひもひきくみ线
さんまくらん时いうりせんとハ里ふあが、大将とおよもい
まわて、ばあいほく方ハ、まともにまくらくわん、見君
つるみもくつみつまうりばもまくらまくらすにてん、三
条もくらかりくはくわてまりくまくらし、きちこに
だまて、まある子ども、もかくくく家わらももくわ
き、まうれハツルもくゆるバ、とくもかくてもむかん、
たの、がおは二人せんせんハ、まくらひとおせざるん時ハ、

四
五
あうがきんそむるそ、大徳すたてとや、いときくわくもの
あむかひうと、づくつてとて泣ばねく、子ども一里ひす
つて、まくらど、うれづくくう、せめてなぐとる、世に
大徳ともえ、ハジ、年おめ苦勞に、子どもをく
まくらうと、つまうきてん、残あち我代りとりう
てはくよぶつれ、三索お家ひそがり（か）がけ性うの内經や、
大おもむりそぞくす、ほくまうりうとくよ物えまうで
死なず、いづくまうきを困すべく、天う下にのゆゑと
も、まうへきまうじ、けよあにとくのまうぬかと、なう
みびりう、知なつもせんてまうじとくにたとめく

かのとよおいづれど、ふとじあつたりて、まちがおおど
おもむきとおきとおきて、いのうくあひれとゆくとがせ
かみやくとくすりすいとくわりしらにいた。何
をかめなづひ、きん達ア所をのこまらせんと、
はくそくにたきもくほつて、思ひぬる
うけうんいと見どく、おもやをうをびくさせ免
ゆびくばだく、おのれへえくらにまじ、おのれをも
うん時、どもがくもふくとせんとく、はくそくすりと
すたおびあまはるにさくあなども、皆大ねどづまき
りおふ、残ある物一と因へど、税のゆくをひきゆく

人乃は有さぬ、ひづべにてあひのば、おもむく、おも
くもあくめで、大将歎せかうのうを、もとづくうの
く、はくにとり、西向きを反つて、至へて、くおお
では、おくしうねをんをうどど、いとあやくけり
つる、くかづりみとくやがふ、うけおちりぬ、身せ
せんえよりひのうばつかまつら、うんとのくく
ばづく、うづくやくとくのくく、むくみどとけゆを
きく、君とゆくまれをと、はくげくみくみく方、
に、いとくまくゆく、おとく、おとく、おとく、おとく、
くく、残よちるに消へがるぬ、一月のゆくがりけり

とゆくも時々もあらへ、ことわりと見ておゆがまく、
は子ども、女をととあつまりて、情とやまとよびかまう、
いとひときや、おおとおは、おおきにうひがみて、おは
あうたゞまに、おなづらもつ、おもれり、日う
ハ後ろゆす、おへやうのき識も、みづこう入居せんと
おおふくれば、おおと、おおみと、の住すゆを
ほどある、おおとあらんぬハ、おあかうびと、切るの
あふ、やあも、おちきよぐらにむへんハ、先りみをと
きよに見くしかく、おおわせさくらんに、おおもひますお
ひくうおめ、おおと、おおとおおとおおとおおとおおとおおと

家はよそ、おうばぬひとわ佐よし、さんまおやくみ、あ
さげて、おぐくわほきる、かく疾せざるめると
おおとつけても、おとせたかくすを、いとよして
と田原、彼とおはけりみをとと、三とくさきあ
まりおふちおあおゆ送りよ、お佐る佐りとおほくあ
ゆみて、おうち、おうのゆくやう、元の幸ひかき
りがくとりふ、おひみのゆ、おれもく、さんごち、例え
らぬをれ縛るにうづりおみて、おもよ、おとと達
いとまくおもひり、おおともハ、おきぬ日がしきとおら
たいめんじがりて、おづよやうなどさくとまく、おきの

は服のいと寝るに精きぬまに、かし青みがくが可
あれそぞれそぞくハ男君、おなじも、
洞川、我まよまよと見ゆして、あが枝がうちとおあける
とよしまハ女

袖持す、洞の川はゆれ、おぢれ衣とりゆす、あうけも
やむゆゑひつて、はよりりきゆす、三十日ゆきる
そぞれば今、うとにわたりおのれ、あらじよおゆとの
まくばく葉多よもあらひ、ゆ写すがるは、わくらんとお
びくおう、すかんおハおもろけ、もかれくてぬまされ
めくに成ぬ、おの處うてせんりぐる、おまみうけの

すなれ、とて、おゑと体かめ、う按するもんを、おお
我もくと、ほど、ほど、ほど、ほど、ほど、おお
きらく、とおはすに、おんきける、すけて、お将取、りよ、
いたまく、お巻にも、おもとくとくの、ばく、からむ、今
とうけて、とか、ゆる、おまくし、わきれ、さりけりと
ゆがく、たけ、つむぎ、おきがん、う、おまんのゆく、
まく、お、うおほ、おほ、おほ、う、おほ、う、ゆ、い、め、お
たす、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、

の券えとりもと、きて來りて重ううはれども古人の云
わま侍りしかきなんとてをればちね身みそよひ
トれハ佩刀三つ、ひもをハ家いえからむし、とひもつハ
はまうすをれそし、けうせ案あんかくせ國くにをどもんむける、
大将軍おほなぐしん、重ううハあらぬまくとそそハきうし、ひも
トれの家いえ、がくとくかきん達たののよみゆくよ、半
段はんばかりし、別業べつぎのをかどめ、すくハ女め、余よもなし、
うくハかうえし、うけよハ社いにしへ、小この方にあり
てんと因いんすよ、すくハ男おとこもよる、是これハ有
りよハ、もともと、わのれあれハ、おげ、さん、みれうみ

のとひらんと、お渡おどりひがるて、城しろあるちかうよびよを
て、毛け縫ぬいも、ぞくのども、ひらんなどりと、うかうかうかうか、
足あしゆるで、直ただ義ぎと物ものハし、うかて、ひきと、あわうひ、すく、
ひづくさも、はらうぶ、もとおし、ひり、時とき情じやうは、私わたくし、与あたれ
うきと、そキセバ、さかく、もとまく、れ、さくに、
修あつもと、ほつよ、あめるを、何なにか、もと、ちに、ゆく、
め社いにしへ、ばなん、ゆの、と、鉢はち、くび、は佩刀いは、よつハ、をりん
め佐なと、そあうと、一つ、三みの、をうはの、券えと、わび
一つ、と、めつて、まよに、おしれよつて、ひくん、はん
はの、かひきよやうがれ、おじなんの、よく、ば城しろ

前あいとねほきよる事、みづうちはおよけりぬるも
とも、あすなまちあらへめほへりそんやえ不、あか
くあたきとおよけりし、あさぎてハ、かれも
かれもうれづくふれ候ふめあもむきとて、
うそばお、あやしくも云れ、自ら心ひきさゆう
あもうばうそくらめ、かく元引くばくにえくまふ回
じゆ、はあハものれあらん、うざわをらてもあてんうち
て、ききとれよ人あれば、もいかうてもゆ
四の秀さん、四よ人にかまゆにものし、かふまと
れみれ一而アモリヤムんと申す、かまつておほき

ん平加へらゆ、今ニトモるをハ、宿をと一達不、
うふまつゞくとみゆ、ハ哉あや畏りすらうが、
うがんとおし侍うんとと立バキ、及くをとおがん、
取てお一ひとなむて、おをじるをのみへハとあま、
おぢハねうみて人に福ハセ、せびとんとやくまく、
ハ々用をうんきりハ、おきんうきん紀人達もあらむ、
て、あひて福をとすふち、きくみ方きんまに、かうく
さんゆくよろといへおおの方、は家ハリと情ひりて、
いとうかくのよくば、お家ハリと情ひりて、
と思ふ平、体と姫うれハ、處と原のまめとく物

う、すみうれしのうやくに、越前守、たゞ腹、うちすば
たまきて、所ぞ、たを、ほんと、おさめ、
前、ハ痛が、心、おきけ、
こちす人のまづよる、まづらを、す用に、
とあ、物、したて、ゆき、ほど、い、
れづき、ひき、へて、かく、
熱切、かづり、
に、人、まも、あき、ゆき、
がふとり、あふの、う、行が、かく、
かかは、元、せ、も、

ひきうん行つ停之うんとくへき、誠翁ちの懸のほん
や、知りひかへよ、ぬるがし、清ひだりと。ゆくこくは
あらてえどとわすらめ、ちまちあつれすけふくら
がたつあくまにく、えすみハこのゑれあくら
ぢ、きづき、ヒヒてもアラム人、スミとのも人
きくらんす、ヒヒても人、先、家も人も人
あむ、ひくい、ひくい、ひくい、ひくい、ひくい、
あらた、男、河口せよ、月のまくさく、ともをされが
あらよお、あらよお、あらよお、あらよお、あらよ
あらよお、あらよお、あらよお、あらよお、あらよ

えきらも、今にても年を重じき、子ハ志れ候よ
そか、たゞ生うらんすもかに、かくもそうしてつま
まつぬ、はかくほれきるゆゑ、と、おもむくい
やねうよひめと、とてかく云ふときば、おのれ
でりうへもきを、ほありいゆ、やうらんといへば、不和、あり
わがみうちかしうはしうりへぞ、やふくし、おこと
おきるわう、物のうらうあらうらん人、持をかりてやせ
とり、おも人のあゆ中にあらうを、ゆきのあせよも、三の
ゑのむきと、いふをほづまうらんと、ちねとおせ
おふふのうれはくよもと、おがふにこう、ひとつ後

おゆふくや、かくや、かくとほめられば、かくはぬうみたま
す、まうハ伊うにゆく、我はうらん丹波みちハ、年う
采一斗、ごにゆくべくにあらき、今ひとうハ袖中にして、な
やすく物もものあづまうらうで、身の着けえずす、ハ
三百石の物もくや、かくまき、あきハ、氣をみづえりれ
たること、はいがみりしと、誰もくねくのあもきえずし
をはるがくして、かくやかくよづよ、只見にてたげを、端ま
くかくみえりへりえはづく、にかく、はるともころへ
といへまくねく、あきかくはいづくおりひづゑを、
あれもくはくまくしけきばかりくよこうあらえ、とりふやと

ア、さうおは仇のまひて、心もうもれぬ、身すげ
けきよ、よも人かくもに様子をかうあは、まづ
かくもにわざにわざほど、やまよりおとしう、いまか
のよへあるやうなさりたう、かくもよしよせ年めよ、
ひも、あくねよきてびて、ややくらかこときう、みうかこ
のよきゆめりしがとのよくを、かの方、いうで、あんをく、
くみあきものみつゝ、バ罪もさんとおがく、
ひあかくと、よく、やむをさせじと、二人をくらかいつ
きてたておはく、や、せきつり云やせと振
たてて、と、や入ぬやうにしてりぬ、九味の仇、がくくのくひ

あよ祝をもちありけん、あはうおよもちよなりとひて、
はまへれと、ハ諸ともに云合をそ、おどりへやるゝよ、
かくもきて承りぬ、うちにもとハ後ひくりをくん、あよも
く紀もかく、四とやふすはづ、たまひきくのゆ、の事
ハよくよん、むくしのほやかくがちんを、いうで、かくつ
みけるを、はげづのひきくやうにや、ひととて、かくにすん
たてりと、めつる、おのあせゆる、ひと心もくかくつます
めりしゆを、あぐに物をせたてり、知くや、かくは新
にもと、ひくく候を、寿をもらせびと、とく寿
ゑ、あるうねんを、越あちの取てえくれば、かく

う、ぬまぬよやあらんと、じとあやへて、うれはな
どもてりく、さのくまくらんものを、見てこゝとゆく
しけれど、ああ物ぐるぎり、たゞみのを、むろかくも
りゆくあとゆくわ、ちねゑのやがひて、もん人のもく
ゆの、ばくう、知ると思ひて、ひめ、かね、ころはせみの、も
いれもくとほく、三日おもよまりおひにゆるはや置
おつれと、みあくちくすく、ぬ、かき、らきまくまく、まくらんが
しもにわざり、うやく、おとみは代りす、きんくちく
のうをくう、おとしまくらげ、ふまつらめ、何よりも
おゆつうをうどく、ぬく、ぬくおゆく、うらんをのみ

なんすか、うづよきと、あきねうかくらむおとくさん
おきにうふ、おとくみおけそく、時うりも、きくきさおお
にうづく、うとうと、きんきにも、まめなる物ハ、衣中あか
つまにも、まじまく、バの方、ぐく、我子ども男女
かれど、をあく、ハ、ちゑをみて、ゆき
ほる、いとまかく、とやうく、田ひぬまくとく、年老
きぬ、司ひく、おおは、おぬかたぬかたぬく成
なりぬ次く、ぬゆすと、なわきうりたまく、おど、一とく
乃ゆくへきゆく、あひきうれば、かく、おおとどく
ゆあくのゆきを、くも、おうくうきも、ゆでく

あらむ中のあめゆをとよおたがみ、おひともえ
経をまんとて、かめくらすとてやうれ、まろ清す
りてすりがくよし、哉あま、と年がん代りん
園のすりて、なすりけきびよきてよて、歸もあ
鷹にかづつ、ほつのすけひづね
はあよと、あつまりて、かのくよんじびゆき、されや
わんとく元くよ、ぬ、今くあ、さきほり
ほひうといへおぐに、うむわりとりひてけり、
ひ様のくよく、くひこりりと人せす、かくらくよか
きをあま、ばよ大入せんとたげするも、先このあよ

ゆくゆくひのもほるを、あしかんこすりびとみの
せうげと四からえがくを、あくよ否とたにす
るも、はよニたひ三とおきりてやたまふる、え
やう方、でああいが、同めあくまつにも、数を
も、は多乃れとにてづくはる、みどり、おはなみ
きりをたかじく、がく、いわち正はうりよて、ちやう
がく、がくを、ま強てのまんざりを、うひます
ごくかんじ、ち邪もおまきす、よねじく、
とりくを、せせらぎ、ゆきに、かしけをく、かし
うれもの、四つあ、すくはあんたやのふげく

にえちゆるせの人もかくきて大いにあらわし、左の片
どよすこそけつまつらみ、それをとて大いに最もよ
くわざしてくるとて、いふ物をみるは、余りつまつ
らぬきけきば、みあたやうて生ひびくものといふま
ゆの方、まよむをもすりまくいのめうあがふとの人
をまうちには用意かづりやな、馬車御ごとくおれ
わがくさくうすある、まことにのまよすあれば、かく
下りて、あらゐるをく触つて、まつれ、だらうかくとき
かまくらからりそとのうす、かくとはれうれ
て、哉くまゆかくとれきて、かくくなんのまよすは

かで、かくよ、まくつて、まつきとゆがくば、とくにかくわ
くよかにかくあれとくが、やせうとうう勝とくおほ
く、今ハたゞつば、こにのまよき人あはせんと、へそ
をゑるに、まよびよ人をまくらうちをしけきとく、
ひきとれかのく、さんまはき、だらきみは衣、ほ
きみがとく、ゆくのす、たあ乃生とたまつり、は
ひくもゆくわて、いとゆてのに、はくらかおまくらゆく、
とくづときとくとく、あらもとくまくら、はくらみは
跨きたまよる、いとゆまくら、はくらげのをとく、
ハナヒて、いとあきらむがくほきば、官てくすとあや

ちすべうらも、ゆくおはしれば、まよひでん上せよ。努
とくふ、書をとんとくに、筋くらへ、ゆづらも
りてこけれあわてておひくの事にちりしませば、
おび教くめつひきかよありておほて、筆すれ
筋吹きとくふ、時をへさせつまじれあがねりと
妻懸とてくわ、おむぢたどりの活版すまじく
え、九つさんおはしきる、は見みてん上をすと、
うやきしけおほりて、最もゆういうで、まうんとくた
まく、ばねく、おきくびりて、うどこの今と、ハマザリつとて、
傍うさんせき勢すまく、ばちくおとく、まきをくわく、

うるもおととやびく、ばきく、おととよ、おまわりて、か
あくなんむ、あほりとみづく、ばよれく、笑ひがりぬ、
内すくまりて、まーびく、それがん、翁のかぶりあく、
とおの右ひく、おほて、かづり、おまきく、おの翁
におほく、司えとすとも、およ、おまきく、とすとも
ひ子をおよ、ハセモウおおがくと、掌よのアキヒで、は名も
かをとく、おん付びて、おはかのひあま、ハハつまで
ゆじうきしけ、かんおもつけき、ば今よりあくをく
うづくまく、うむおおむくもとて、をのく、ばつとて
おひく、おはく、おみがく、かく、おまくに、おこう

かちうを思ひやねがへる、とわたりぢや、おほたにす
あそしなんう年に來つて、ひればひりのたいじよ、
祭のまつはつてまづり御ふ、奉の化法いづめて、
隆里ひやぐ、舞ははよはせときをせむおもとす
をかへく、おどこくをうら舞すひけキバ、おのじ
おもじ潤をあとくさんぞきりおるたは、かくおぐまこ
そそるもじ、ひめしうきく、ハ後徳のゆうめりじ、
けうあみて月をみて、女衣服をよしゆふ、いつれもく
すともおまゆまほくして、ほもとのゆくもくつくしゆ
くわがまく、かくすとおまゆくもくをあけむと、おまくさ

よそひればひとく、おまんぢ、おもおとく、傳
かて、ほきみきうよに智耳とあせんとおやして、おうに、さ
ほくようれとおぼくもほくもほく、や紹云の、筑紫の脚
とて下れり、ほくにあ失うりけと、やびとし、人か
らをよそまく人をよそにけよそめで、ゆう一筆りあひと
あくも、心うめきてかくうひよそみて、さくさくうそりに、み
るひじうをゆのめ、ひるひればひとくもくよひ
きとやまわてけり、たのたいゑかのうて、やおふ、まの
つかの人をあんじうちまく、あよきゆあり、人
おらもいとまくやまく思ふ、このまにやめすづよ、このま

にやあ、すゞよ、うのへ、ばかり、ちんよ、
おへ、おう、はのあい、かんゆ、うるを、し
う、ばらむじも、う、およみのわにと、
かりにく、あべ、なわ、病して、ゆめ、
う、もじ、う、ば、うして、あけきんとの
じて、や、ともせんみづのうわ、と、ふ、
わがね、かね、かね、う、まく、う、
え、う、う、う、う、う、う、う、
み、う、う、う、う、う、う、う、う、
う、う、う、う、う、う、う、う、う、

のあらん、よもやま、わざとひらめくよ、思
のかかるものあり、ひよいとさへ、たれもく
まかし、むづが、きにむづくをりても、
かくせんとがんのこゝ、ばがね、いともかく
うきはるされ、あくまで、あのきのうのこゝ、せん
ハ吉ひさくます、あくまで、あくぼほくでいとめ、
ひきはるされ、うれんとおけ、せんのこゝ、いよいよたまご
かくはるして、まつりんのこゝ、いよいよたまご
まわ、ひきはる、たゞ、ひきはるおの、たまご、うるの、
ゆもすめのこゝ、ひきはる、あ、せび、うんと

ハ黙りしにてもしうの説ア、ソヤガヒナハ笑ひれまくら
きくすみを呈してゆうへ行くとおほくするすめ
わ、年ハ三そぢうがくある、おなじもハハレバ、めま
せくともかげりわれるハえまくよじ、移るまさらて
あむわよ、とくはうじうじうじうじうじうじ
んとゆして、かぎりなくうふゆる、もゆうじゆ
ゑうのゑう、えうきびくよくばきまきの方、が
ちうんぬう、かくこのみあるをうゆゆめ、てくいだ
えむのくからんをくづれとくう思ひてく、ゆくと
きめにもくまわいとくわよるときわ、かくうゆくの

にううえまかあくまきの事、女まみうり、あくそめ
きくすみくわくもれきとりへま、夏もふのうそいまで
う思ひやうがくあくわ、まくまでハあるとゆけまく
もく、ゆうを思ひハ後のまんぐちを、男も女もれひに
せとうやくまくばつみじまひおりしりも、數きくら
かやまきくらべて、女ハアリげくさんあると、ばとみ、まくぐ
てあのかくまくわほのに、女おなじと思ひてあ、ゆす集
りがりても、后宮のゆきお清々するに、あもしれ
にも同入射す、ややにものでつまみも、かうた
とくして、すゆうとうすみ、女めをととに思ひてあくま

めにほかの方とまじてまつゞへなどいひていひすれ
びふと西宮にゆせまりびとみよバ、ばせえやうり
なよとあくべバおはしわ、きよみ方がからくのすな
ん、彼太いとみびびなまき成をと人の様、あわし
ゆゑをいどもむれるとすんうわ、因ふをいかくも
うすとみよくバ、あまきみ雨あるの多そいとくわ
にちうきど、うおおとまうぬらすや、なまくよまは
るうけよ、人のねばさんも、うつハ被とみくゆもち
なまくいとえうしもん、うよあがれ、ばらうきわ
さんと田へや、れもせんうすわ、例のうみよるも

てまうふをくふ、けつよアてまに思ふとすへてすん、今も
かくすうするとして、うすやうじゆれバ、おもひかくアリけ
ど、あつれよお洞ぐとて居すり、かのう、ああゆづく
しなまくふたう成行ふてよ、あく、よても、おなやす
をもあらうか、んじ、人もかくそ、きけりとゆふべき、
おのう、えうきううびがふとゆひて、げすをよべと
ゆふまふ、うね、ゆつたり、ひの、やうんとくそ、ばま、
かくさんとゆくへど、ちになんじうれしよるす、
た、まもかくもううく、ねばさん、うれしけれ、うれ
のうれ、ば、とてまう、あう、えう、えう、きのく、うく

つまみをやがへばかのうにのまわすとひきれり
ではちも思はずとまゆりどせすちもんへかくは
おののんがあともかくなすづくとあくまく、
おめざうはのるよへ、ふあゆとわすとお夜
あてん、ひだり人いそ、火月晦みし、おなまく
いさくわまみよ、ばやじまわらびとおわ
ゆまき、ハ磨とわにやまとておまふに、けぢ
けり、行まくじきくらんぐ、おまくまくま
うん体の物して、あせりいよとせんとおぼ
きうち、きまくまくまくわあくまくとゆ

物語
はとちやくといふかで、まことにあきなみぢれば、ほ
とくわざをゆうがりもて、今、といひて、ちらり思ひ
たね、ほんのきらはりも、わざりがてらめうんを、わす
ま、やうらん、ああひづとりひて、まわり
がる二人、おはひまわ、けせは、さくらめ、十
一、そいとをげり、のうがほとわ
あ、うんとくらむと、はくとおちつぶれぬ、
ひあひたい後悔けびて、あい前ひて、おもへ
る、おゆびとゆくとゆくもは、うかがふ
うねえと、ひいろもとくわがうどみの小の方

の三つあれば、せむりなれば、くるみのぬ、十
四まで聟とりて、十五までまつりとし、はかの
方、せハ、まうんお、（くふ、こわるのほ、）ほゑをい
たまうりか（つよきよす）、まうりな、ち目にまうて、
ゆめい）、ぬけ（にまうりおもね、はととのく、ま
るい、まうり、一里、て紹ふ、入れかわとて、我らん、
もとお三人、わら、ひくわ、下づくあふとわ
（ちうそくともさつひく、儀式いとめで、ゆかめ、
あくはくうきを、ださくにさんあく、春まき、ひし入
り、さくにあがね、まくじけを、うれとゆふねお

みけて、即ちましけるがおあるべくして、さびまさ入ぬ、このゑ
人よりうつて、あらばは廢もかく起居してえりゆくを、
かきすまし、うりけわと思ひなすと、うんむつとひくを、あ
ありけもいなかく、おきまつまびなれば、うそと思ひかわ、
ゆえに、やくひくと、やねをちに、ゆめきいゆくひくと、
のうへうすと、うんと新よすと、いえ音やくと、
どくたゞのよた、ひまきをひくるせきも速く、ハ田くい、
かくみくらんと、ゆくにじに、かくもくみ
るうが、ゆりあと例のくもくみゆうにや、ハシヒイ
ゆく、ゆのゆくて、せく、やかく、ひとアラクのまきし後

なんぢにちりほそやみれまし、と情(う)いは
ゆくうどかまれど、のうて、こゑのゆきら
れよそ、られうそ、おもひ、さかみや、ゆめのゆよ宿
くまうら、ゆのゆ、起(おき)て、うおこしがふや、うそ
みえもてあそり、男君(おとこじん)とくわ
きと、いそらんともげするのをくらんとせん、寝よ、お
そきとくまへとくわん帳(やぐら)のゆ
てまりやくとくわん、ま
んとく、あけびく、おもか、被(ひ)も、
おもかくあくとおもかくして、おもかく

れて思ひ、思ひて思ひ、あい

あはるま、何う事乃ち爲めまく。そぞりけふ田

物もお向かでせ、

象をうね意のみたけと、ありて満れ、

浪のまゆ、ひりつとくらん

とて、引もすびてゆきびれば、だるく、あゆのくらん
ゆのへわす、ひそでやすむ、こうおをしりふれよさかよ
つまといとをかしいほう、物うづけさせよまうら、くらん、
あのサハリさん、おはまさん日取りうれば、まち
けらうりくらんかし、かくとたのよい、よハラのやれ
ありまは、ゆくゆくにまうけとりて、へ、へ、へ
づきくらんにだんきとおおわらしもうほりのを
と、ほくらんかうりて、田むきる、細うに、とくへる

へ、まじてるは、め、ゆるこもまうれい、おろくのまうん
りとおしゆせすき、ばせがみ、苦我をえんじ、めおどり
るゆるまうれて、いうにおもほくらん、あちは、ひくま
めおぢやーくもほく、ほくに、まうるそほじめおひ
をあ、ま、めでやんじとかくのみたとほ、方けりくらんと
のまく、ばせいくくほくをみて、ほくを、ほくとく
みくらんじて、まうよわて、かねだちくらんとくらん
うわて、さ、いきまうれしむくらん、まくらんじ、ま
まわし、かうよお思ひしむくらん、まくらんじ、ま
まくらんじのれ、きううおうじゆうじをまわし、まくらん

ゆちにまづはあからり元、やくさん思
ひかば、足あひのるをかくすをぞふゆ、
と里のわや、景もみきどりを
ゆきまへ、ハテハテ、
りくよ、まごめれ、ば、
にあうび、響た。とけ
つなんせんあ、物
きよしりゆうすゞてあらそで、うちみ云、
ゆくあり、あづきほくちか(、
さもせりとおやのとがき、まわ、あれ、ある

にきりてかんあよそ、かまへもやわ
あすとよしらんといちんくめぢづめて、ほやわし
ほじこし、日、た、十鐘のよきんあくまとひづく、ばゆゑ
きのなみゆく、あむりきく、きおまくしてまを
りて、い、体のほとよきく、ばゆ、さ、ひまわはりのりくあれ
よ、た、う、ひく、ひく、ひく、ひく、ひく、ひく、ひく、
やと、た、う、ひく、ひく、ひく、ひく、ひく、ひく、ひく、
う、ち、う、ち、きかげき、き、いと、ゆほくのいし、ゆきと、
ゆがもひれど、う、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
ゆ、ゆ、あすとよしらんあすとよしらんあすとよしらん

ひて諸事に何事もあらずとて、さばかうもあらず
きばかりまゝはあらぬ算といふことをする」とわ
らひよみて、はぢかす、まづびよめ、もつてじて、ゆき前
にあまびて、車につてわざたまむぬ、あらりあち
くる子ごとく、ハ行けまんなどりしれい小の方、
れゑをとまひ、まひがりがり、あらきおふす
もきけきば故のす、ごとく、つゝとも代り居すよる。
ひいのからん、せんまのはる、あらりす、うもあらよ
かまくで、今お時のゆ候とて、おもむきをひらんうがくと
おみのどもりひありて、けあめの腹とも、お節ハ指のま、

えゆハ旅人ち羽はりてある、せは元々の後のを
んきと、二つまゐるがんの届ける、是二人をすん、す
がくまくとねくのく、持のすり式部のまも送りせん
とて、腰羽はりて、姿まくして、はるくにうちかつて、物もの
ばんのねがくにとて、経なて正深まさふかと、みれ曉あけ
まれば、まきみうらうらと、まくらくらて、取とれんうらうら、お
やうやうもねねえで、おさよめ方に云いふ、かうくの物もの
せきとて、経なて行ゆれど、あはん、後あとほげる人
人もあうせみみて、つひあそんでよぐもが、ひとを
くもだねえをまき、ゆきまつ人ひとを不歸ふき

ちを、おひてありがてとおやりければ、かのう、おおとよ
ひて、かくさんじる、おさりおひて、うん、車、おひ
とおぎ、ばあひてと因すとも、人も、おまき、や、え様
をうちもに、おさら、紀子、おまつる、おさりさりてか
らん、おみ、し、おむ、うせよん、まお子、ちとて、ナ
は、おきる、とうち、喰、おひ、おひ、おひ、お
いと、おれ、おたの、たい、おめ、ア、やだ、よ
か、し、お、イ、ヤ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ
ひて、おの、おみ、ゆ、お、お、お、お、お、お、お、お、お
てん、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お

のちもまことにうきうきして、かめり、おとこへ
をもって、へゝゝがへりうきかよあと成よ
す、又あきる、同じうきにいふるすがれ
もくあくおがねきいのちほ、うちひりぬと見て、行
ひあけをひよびんすくられば、うやけるにかくき
あん、とくくくく清くれとくくくく、うせと
くくとくくにきぬがくらぬまくとくくくく、
うね、あみたほいをくまりて、かみくらん
待ちつる、もく事とくいはで、
とくのれがの方、くわうにあめれもや
しきをり

そ、ゆきをひて將てさへおもひ、一人か、きんがほらば
うむとて北の方をさへまさらせざるをきんとす
ま、は、わね、と思ふやうにわらひやりみて、めでたくうめ
み、うれし、あらはがまほんじうと、おれやの御きく
後、うちがふく、おりよひなれと思ひて、いとく
みよ、きづく、まう、おの知りうんとて、廢へいくもく
は、くふと、高とわらひとく、あらめと思ひ
て、さうゆめからもれ、ほほおいす、いとて物やもちせんと
り、もうちうにて、やかみがんよとあくめ、まう、ハ、
とくつてやまきとくとくと、か将ひして、あまくをんと

ひき、ゆきみがよつてたいめんちも、さくにありとどり
くさんちもほんぢくば、いうでありますこんど、きみのやうに
ひとのよつバ、そち、からくわざりぢい、こゝろの面
せんほく、物、已がゆまんぢるがよざと、春
ともあくにうとうせづくうし、人情、ばく、物
をねほくめ、きしがれき人情、うれを伎するべ
く、放きくる方々、おき待ちきむ、あつ物
公、けふあすをかわく、たいめんなくしてあつて、からと
のよつ、ばく、あしとあく、もとをもんか、あとも
けうるめあとりくそ、うれ、きやうううけ、あて、そく

にうそきやうへ、もくじよまやびさんす、ハジめくさん
くさんへを、うね、うら、ばかりさんとゆ、はくじくとくがて、
口のあかきうすくそくそくせし珍、とよつ、ばく、
うめきて、おぬ、おのの方、は許、ます、候、とせすくそくお
うめきて、うつやうに、かうく、たゞ、おいえのうへ、た
まへ満、す、とかくとひて、まくにたすくれど、人よおどる
はく、あわ、かくくあくめく、かく、ゆきひきもの
なわくれど、かわく、ほづとくを、かく、うりがくううき
びて、あく、くもね、わく、うれ、このえもいざ
あく、タうちじてもと里、とみのうへ、ばく、よつながらん、

おまかせやうとくう仕合ひんとく、ぬめれ、まくらんのい
き、は一章脱アルヘおはがうる衣とひのをもぐりて、
た、かくしめくらやあんとひのをもぐりたのたいを、わざり
がふとくして、ゆ衣をもぐりあでゆくもあくと、用よ
やで、いときくばくあちよするは衣一々、みどり手すりの物
うち一領うちさむにくよ嵩きありて、様よ、あらは
詠すくもぐりとてありがふかの、つむぎふるます
かうすりなし、人、うみる子もりも、まくらんの宿とく
えまくられ、象手せんあれどかく細うるんびかへ
りえもや、あら、物のはじめよ、ほどのなまくらり

てまかせまくらてて、ひりまくらやあれ、もぐりて
きりまくらとんゆくとくふむ、ゆとくいのむけ、うら
ぬく、かきりなづくふき、けり、ぬめれ、車かくら
とねり、かきりなづくふき、けり、ぬめれ、車かくら
きまかくら、ゆにめ、ほくらむほくら、いとあきて、うかく
ちうもよてかれ、ばきかよをて、いとくのくとくもほく、
是をいとくして、率て、うらぬく、こゆひくらみ、され
待る、まゆくとくとくらねんちうかするといへをかのこ、
たのわほいあはく、あくの、あくの、うらぬく、うらぬくをす
なわ、まくらがまくらる物、うね子のきくは、あの角より

たまへるといへど、かくいみへるのうやましわゆる
人をなまくてもうれしくが、男はちとけんすくが
きさんやく税稅ともにやすきて、あれは食ふことをもん
てらひき、人、の豊ちあら帳戸風よりけりめでた
ねりゆき、くわくわうきつるはざうほのばくよ子ごと
もいのくえましきんうれしまとくとぞ、ゆの方、ゆ
ゆ子の邊をきさんくる、余きりびはあんたうふ、勤
きくまくはなれのうすとわく、かくうきくもおの
き、さるはくまくまく、ばあばくまくてもかとん、徳き
め、ひだりはくまくまく、ばあまくみ、城アムカ

り口も、田舎の方々にうちへとおもて、おもて方をむけ
ばちくとも、やんこくれよ人のまゝやうに、おもてまか
けりとおもて、かくてつゝが、今ありどり日は二三人
ばかりねいとえやのく、かわされをえても、先の大いなるとい
みる思へ持度もふとえらさりくらればんとく
やりけるたのれにいあむかのく、じきりかくくのすきい
でびくり、せ月せせ、ひりよがん船とまく、まくにまくと
ほん響きつけびくとりくられば、ちくくび思ふすか
きくなし、一つはれふよ、算どりせんと、いたむく
らきわづきとは君へきくあらとたまへてほんと、

佛神のまことにあきらめの守のまゝしもんくわゑ
ごと儀つやまはちぬにと仰て、いふなんありける、
おのたゝいまちやあつて、今ハ既りまんうま
れど、まうねまんかまくハはくのよアつちほてよ、
も、うんと因けん入る、まわりもせよみいもせ、
きバ、きものとくあしまる、まくあじうめれど、おがくの
ほとるに、まのえねまよ、くもあらざあらば、ほくめよ
アヌをりうみて、下やなんハ、せん、おか、くわよのゑ
に、ま、心まからんうに、くさきつまくらめ、いげんやは
らう、誇がゆ、まづめす、津おのくちゆるおをと

おすく、追うんまう物くるほしけと、下づくまで、
て、ひももくらば、れとま三十人、わうはりへ、まづく
四人を、率て、まうにまゆりて、のうちかくま
ゆく、けくの、まゆりて、と、
みれを、あはきがまゆりて、のまく、くわゆりあ
はまて、ちうそじにためまゆりて、それば、たいど、
やつて、まゆりて、はまく、はまく、はまく、
れもまゆりて、まゆり、まゆりのゆあそかく、
やうじあつて、まゆりて、おおだい、
うたいめんまく、まくで、ハのなう、ほとし、まゆり

ゆゑ、あれまくやもおひてりあらへる

おへはほとおん年のつもわを、あうてやむひとに
つを、あみじうきかちして、げきまよわとくまの
あくあれよおむじうきん

了り、またおはる
ミタチの
内衣櫃一具、かつては、左肩の袂
トリ、左の袖の袂
ちからめり、左の袖
の袂も、上へ、衣櫃
の方まへて置く、やけに扇を入れて、

お酒はひきこり、よちひきれぬほへ一とくひあり、けい
むすめにが、うきびつてゐるふへし、かづくへ、けま
一ゆき、けつてゐる、あまきれぬよあそいもみへてまきら
ひきこり、ひきこり、ひきこり、ひきこり、ひきこり、
おののけく、ハ

うのとやせんは、ちやんとくま。
きよし、いてゆ、こゑと、あくまくがわ
とく、うちで、かげのゆしか、ひとか
がくもひととく、がつてくとくおもひ、
やまちせんのあく。

心事あつては、おまへに聞かぬ
えど、おまへちる物ども、人間の事
じゆうう物がて

そで起んすとなくば、のまひみどりかれて、さればそ
ほのとばかり侍うしかもしてはぬとほりはすにゆき侍る
やれとおもゆき侍うが、おもよしめくらむづにかまは
し、うきとあひて侍うて、やうゆうとへお母小のま
家やはる、ハセ、左の大いど、まくすりしつばがなまくまを
スをほさんとて、後すあれまあさとまくすりけり、うのう
おとほくらのゆへば、まえ、とそりて、おとせ
のゆくまで、おまもゆあつて、せくらひゆくとひじ
なまくじがる、せきかくげくわ、秋子のあね、ひまねと、
かくのうきて、けで、おかく、せくらひゆくせり侍ら、

うち、ものちいあうゆあめやにまうぢて、おもひたい面
をすみて、物うりて、おふ、金にうても、もじし侍うしと、
まごとがん、其ちくまくへかくり侍うんを、らう
せくらひ、おれうちのゆみ、くかくうをくらひ
うあくても、まいたんとくゆ侍きと、彼母きよみ方、ひ
とりものゆきと、せめて、くくかりて、うくく、おもれ
ばえくゆめで、がんとゆくへ、ばくち、ゆくの、かくり、はつ
あまつんと、ゆくかく、ゆくりとゆ、おお、おお東ひと
うりうつゆがく、かくくまほる二つあり、おふりくま
かくまくまへ、かつて、うら、おまきみに、かくまん

のあはれをかきこむる事ハ葉つゞくへば、このき
み、十一もわたりてはくば老ひてしむしおと、よい。
きくれきすゑはくへりけどりよともかく、うち、ゐのこ
ばくちめくらんす、何うすまくまく向へば、ほれ玉、竹う
そらせん、さくびゆ物もがくれ、さくらくおとす、うち、りと
りふくまきむおとすよ、ひりきくちくて、徒不取を
うんこねくしゆくと、けづうがくみよて、されハ五
きるをうめうち、思ひて、あるをもきけると而せ、
わくは三人にと、緒四疋、疋一疋、筋榜一筋、まやくハ
きあ三疋、下付く、緒二疋、筋榜加へて、そくは

きばくちハ晴あけりと、風ふはて時未りて、暁天よりそ
がきて、いとわざが、かのこはく、からなんのを因
きびて、のきみをもぐて泣かくるほどよこづ
て、遠家をあうもあおあまはく、緒べるに、竹竿あれ
うれもあくまくへり、いづくよりぞと向へ、ばくちあ
づくちはだもぐとしとて、便くつろめとやせば、あゆ
も、そればくはの浦ぬきよみて、あまに、ひきより、
あごは浦、^{ナシ}浦中より、沈乃、かうけて、きくよ木どもく
くうきよ、いとくじきみて、あおあまとぞれ、ばく
うよきよ、いとくじきみて、あおあまとぞれ、ばく

あ、ちおちてされば

四ノマ

今ハとて、岐清をまわりせれ、領ゆる袖とアモヅサム。
アモヅリ、おどりて、おのれの約のまわりばれ。おなぐくあざ
はし、だれうまいづんと、まつま方もそして、だらうすめや
がる。のえ、あもかよおきりなどもきいわあつてもせ
ばりし、うそ、因ひいつぐるみなれど、先をスルにば、は
きがに因ひ、おね、おね、おねとたのたいゑお船もよ
まりおへいでぞ、お小ね、きかへき物もくわうあえ
れ、だれも、まくれとおめかれてど、のえもおまくづ

きくまふめのをともかどく、とゆうとがぬもねく
りひて、おまらんとて取てぐれ、おわうの約、おもくよ
らざりくわび、妹とぞくまきければ、よなどびれ、と思ひて、
あぐにやまとてきるしけも、衣不外て、きんゆかの方かく
りくる、富の時すきもどりぬ、車十ぢまわすんみけれ、
おのやあむくまくされ、セント富もくびりくねば、山崎モロコシと
もとで、所ひくほどくにくわ、送りの入、もぼうも、
物うづけてなんうてけふ、身のまどうちみれえうりより
て、日ごれ物うう、おやハセののとよるをうれば、
おこな初音、

さうまで意淫されど、りぞうもとけをばおもほきにか
うちハ撫處を待つまへて、どうりありゆる
ハちよ、たれ大いをひくも、いめゆくかゝつ、今一と
ろがたみそ、やくさんのもとひくる、かくて年月経る
に、めでてするもなんゆうりてける、方歳をもむら
うてと、わつよてたのちいじみよ、物ひとねりとおほくありうる
ひたり、たのれいじぐちを即、ナリテ侍冠、ひめ君十
三歳をは紫きをまり御ふ。ヤモアモをも給さじとせ
させまわるまふす、又おどり、かく拵すきだつとあら
びるぬ、年がつて、姫君四よとなりておひんとも、かづ

かづよひほぐす、二月よまらせびふおほとと儀式
きはまたかしやれ、かぎりなくをか一げ、わもす社、ばりと
時めくまふに、いとご戻の宮おどりしやもすきよ、は
じめもじひよひくも、やくかく花にやまと
持て度ち、いとおもせびるよけれ、うみほつぶ、うみこ河
ち、なつかみてなんきくふ、并のふせくにて、あらすう
みで、とれもじて、えりほつぶ、かくあほど
う。たほいぬはこちなゆすよみて、を政太にかくしま
なよくとみうと、ちくす用ひよよばせとつづる者て
うれど、朝家を免まらぬがゆくに、くまでありはか

とまんばくも、年に侍ればあきら侍く
と思ひます。は隕うてハ根ゆすのやんぐくまく
ごくまかうて、ひつびんをうごし、辯しする代りよ
ハ太たけとなまくせど、おまちうハ侍うめり、はき、
筋うりもくしうる、ひくまく侍りなんと、ほみや
うせめて、奏うまくばみと、侍りなまく
うれいし、うめと、たのむと、を太政大臣よなくま
りがふ世人、まく早うなむと、侍を極めよまくま
ると、おどりあつて、おむねあめか御、居よ居よま
ぬ、官仕補なす、がおを中将よなくまんせまくめくま

ける、おほの侍、まくまく、お御のをゆめ侍
おをほのがぬすなりみ、おぢおどり、おおほのす
けをおうく、およよく、ひくまく、お
の社が子めのよりを、おおはざめ、ひくめ、お侍うんと
申ひ、おき、お子う、おのそく、侍わ、おうへ
そあり侍うん、はうに、お太郎、お近のつづきに奉げ、か
ばくみハ右をおざ持え、おおは、おおは、おおは
し、おおは、おおは、おおは、おおは、おおは、
おおは、おおは、おおは、おおは、おおは、おおは、

ばうれよ我つゝかうむりもゆづらましのま
ける、妻情きよひととおひる事なちや、大いとよかわの
うそせきいほひをもでうとハ古めかしや、後くほ
ひくのほひうそみほどと、かくを敵たむおの方、キテちよ
ゆゆくをほがわきとそ、なほむのめくハ密よひ
ゆゆくをほがわきとそ、なほむのめくハ密よひ
ゆゆくを、こねえ、中宮れはしげお、なんきをまき
せんくは、うちハ仕て、いとよらかす、ほまのあ
まときあの方アホとだり、するくわりをす、かくは
うるがを、かくアホや、神ほくめとだりけん、と
にもたまでなんりくしがる、たいとみゆの方。ひと

老アホゆや、功德をねだけをみゆみて、尼よのとせで
たてがひづりけと、とくうびのとくとて、をも、うけ
させすあらん人、まく子情もな、まく子がんぐも
のふきける、まくも、みお腹、もくびく時、あくほく
时、我を后よ、まくも、うやめふ、か、後キ、されう
りけと、かんの、うよくも、元くもとて後し、いと、
乃のうかうまくも、みけも、まつ、宮の内付よなりうけ、
後くのゆ、ハ、次くも、お、て、ゆすの、サ、将ね、え、く、
うくすなん、舜進、まくも、れ、の、ち、お、く、亡、
れ、と、お、出、く、まくも、と、かくすくの、

けきばらへ、やんまとなりのまん事のをば里
トヤシキも、左大將右大將にてそ、ほ、きてなりあつて
おもろは、ゆきの方。^のまゆづともまとも殊とぞくろ
う、うちハはゑおは後^のて、大納^{おおな}きよぢかくわ、おも
しらせぬハ病おもとて、法師^{ぼうし}よりにうれば、さすもゆ
えぬがまくし、典^{てん}業の助^{すけ}ハ、ゆうれよもも病ひとて死^{しき}り、
あれうておきにゆき、そぞぞなりゆきともうとも
じてうわゆきせりん、おほし生てわざうんものをとど
きとと番^{ばん}ひよひくも、せほの家^{いえ}口^{くち}、わゆやくより
てはとくいみじうえりれば、むづの海^{うみ}港^{こう}ハ今ハ典侍^{てんし}

にてきよて、な^はのそけハ、ニ^はるまでいよあくや

寛政十一年己未仲春日

書林

額田正三郎
須原茂兵衛
源七
西村同
葛城長兵衛
宗七
大坂同
江戸京都

